一般社団法人すてきな大分を伝える会

すてきな大分を見つけ、伝えよう！　　2025.5.1

３月講話会ご報告

「真名野長者は実在した！」（講師　大嶋一任氏）

新緑の美しい季節となってきました。皆様お変わりありませんか。今回は、去る３月 29 日開催の**『真名野長者は実在した！』**の講話会のご報告をさせていただきます。

豊後大野市三重町に伝わる**『真名野長者伝説』**は、**『炭焼小五郎伝説』**ともいわれ、ひとりの炭焼をする若者が、玉津姫（たまつひめ）という奈良の都からきた姫と出会い、これがきっかけで億万の長者になったという伝説です。

臼杵の石仏群も一説では真名野長者の関りがあるいわれます。

この伝説は豊後大野にとどまらず、何故か全国各地に分布し、これを調べた**民俗学者柳田國男（1875-1962）**は、**この伝説のルーツが豊後であることは疑いがないと著書『海南小記』の「炭焼小五郎が事」で述べた**のでした。

この度、講師の大嶋氏は、この伝説を真名野長者伝説研究会（真名研）で長年研究してきた中から、伝説上の真名野長者は実在したと、その理由を語られました。今回は、その主要な点をご報告いたします。

（なお、**『真名野長者伝説の概要』と『真名野長者関連図』**を別に添付いたしましたのでご参照ください。）

真名野長者実在の根拠

蓮城寺（三重町内山）

1.　蓮城寺（れんじょうじ）の洪鐘銘（こうしょうめい）の九州年号（倭国年号）から創建年代が判明

蓮城寺は、真名野長者が中国天台山より百済出身の修行僧 **蓮城**を迎え建立したと伝えられています。この蓮城寺洪鐘の銘文には、**「本殿ノ棟簡（とうかん）ニ日ク鏡常（きょうじょう）三年癸卯（みずのとう）初メテ建ツ…鏡常三年則チ敏達天皇（びたつてんのう）十二年ニ当タル…**」と銘記されています。この「鏡常三年」とは、九州年号（注）というもので、敏達天皇十二年にあたり、これにより蓮城寺の**創建は西暦 583 年**であったことが判りました。これは**真名野長者の存在が想定される時代と符合しています。**（注）**九州年号**：大和王朝以前の倭国（九州王朝）が使用されていたとされる年号です。全国の寺社の縁起や地誌、歴史書にも一致するものがみられ、古代史専門家で研究が進められています。

2. 登美真人真名（とみ まひと まな）(792-853)という平安初期の貴族の存在

登美真人真名は、用明（ようめい）天皇の子である聖徳太子の弟にあたる**来目皇子（久米皇子）の子孫**になります。**「真名」の名前を使用**していることから長者の子孫であることを誇りとしていたと考えられます。

また登美の家系は、**聖徳太子が創建した法隆寺および四天王寺という重要な寺院の保護・管理を任せられていました。**なお、「続日本紀」（講談社）では、「真名」のところが「直名」となっているのですが、大嶋氏としては、「内山観音雑考」著者の郷土史家伊東東氏（いとう あずま）が、これを「真名」としていることを重視し、大嶋氏もこれに従っています。

3.「山城国三聖寺嘉祥院（かしょう）主 処英（しょえい）」なる人物の存在（南北朝初期）

（１）建武二年（1335 年）三月の文書（柳川立花家『大友文書』）の作成者・**処英**が住んでいた**三聖寺**

嘉祥院は、**登美真人真名が豊後権守（国司）の任にある時、謀反を起こしたとされる嘉祥の年号**（849 年）**と一致**している。

（２）1327 年**蓮城寺**の院主職をめぐる争いが起きた時、**処英**が**蓮城寺院主素郁**を助けた。素郁は感謝し、更に**蓮城寺 院主職を処英に「大感激でよろこんで」譲った**と大友文書にあること。

これらのことから、**登美真名－三聖寺処英－蓮城寺との強い関係が浮かび、真名野長者とのつながり**を感じると講師大嶋氏は強調されました。

4.『更科日記』中の「まののてう」は真名野長者のこと（11世紀　平安中期）

作者（菅原孝標の女）は、長者実在を知っている文章であり、短歌であると思われる。

5. 幸若舞『烏帽子折』の中に真名野長者物語が登場

（１）**幸若舞**は、能や歌舞伎の原型といわれるもので、室町時代に武家に愛好され流行しました。その中の**『烏帽子折』**に、**義経の東北行きの場面**があります。この中に何故か**豊後内山の真名野長者伝説が登場**し、何とこの**烏帽子折全体の８０％**を占めているのです。これは一つの謎なのです。

（２）義経の東北行きの道案内では、**吉次信高**という人物が登場します。**「金売吉次」**とも呼ばれ、**東北の金を京に行ってさばく金商人**で、東北への地理に明るく**義経が頼りとしました。**

（３）東北行きでは、義経の描写が『烏帽子折』と『義経記』とは違います。**『義経記』では、馬に乗っているのは義経で、手綱を引くのは吉次でした。しかし、『烏帽子折』では、馬に乗ったのは吉次で、義経は手綱を引いています。どちらが真実だったのか？それは、『烏帽子折』の中の姿でした。旅宿にいた時のこと、義経が持っていた草刈り笛がたまたま話題になり、そこの**女長は、豊後で山路に身を隠した皇子の「草刈り笛の伝説」を語ったのでした。

（４）また、**牛若丸の元服のシーン**があります。平家に追われる牛若丸（16，7 歳頃か）は、少しでも大人に見せるため、烏帽子を所望し付けます。それを見た吉次は、「**元服では烏帽子親が必要だが、それは誰に頼んだのか**」と義経に尋ねます。義経はその時父（源義朝）とは死別、母（常盤御前）とは別れ、身分も隠す不憫な事情にありました。義経は、「**今は、吉次殿を天とも地とも、父とも母とも頼りにしています。名前をつけて召し使ってください。**」と吉次に答えると吉次は、

「**今日からは『京藤太』と呼ぼう。吉次の刀を担いで下向されよ**」と答えます。**義経は父義朝の太刀を担ぐと思って吉次の太刀を担ぎ**東北へ向かいました。**何故ここで「藤太」が登場したのでしょうか？**民俗学者柳田國男によると「**東日本へ進むほどずつ、金売吉次が突進して、炭焼の藤太と近接せんとする。**」と述べ、**吉次は炭焼藤太、即ち自らの先祖は、炭焼であることを匂わせているのです**。

6. 戦国期の武将草刈氏の存在

草刈景継（兄）が、**用明天皇の後胤と明かし**て自刃した（後太平記　1575 年）ことや**草刈重継（弟）**が**宗像大社大宮司・宗像氏貞の長女と結婚**し、宗像氏の後を継ぐ存在であったことも真名野長者の子孫にふさわしく、**長者実在を示すもの**と発表されました。

以上の六点からお話され、真名野長者はほぼ間違いなく実在したと語られました。（記　青井勝久）

添付1

真名野長者伝説のあらすじ

今から 1500 年程前の昔、三重の玉田の里に炭焼小五郎（又の名を藤治、後に藤太とも）というまじめな若者がいました。同じ頃、奈良の都に大臣の娘で顔に痣（あざ）があり悩んでいる年頃の娘（玉津姫）がいました。姫は、良縁が授かるように三輪山の大神に祈願したのでした。21 日目の夜にお告げがあり「そなたの連れ添う夫は、遥か遠く西国の豊後三重の内山という山里で炭焼をする小五郎という若者である」と。姫はそのお告げの通り西国豊後の内山まで炭焼小五郎を訪ね、夫婦となったのでした。二人が出会ったところに「金亀ケ淵（きんきがふち）」という淵があり、そこの清らかな水で顔を洗うと痣（あざ）はきれいに消えて無くなったのでした。

（三重町内山）

小五郎は、炭を焼く窯や淵周りにたくさんあった金をそれまでただの石ころと思っていたのでしたが、玉津姫より高価なものと教えられ、これを元にして事業を興し財を築き万之長者炭焼小五郎といわれるようになりました。

やがて二人には待望の娘が誕生します。名前を般如姫（はんにょひめ）（後の般若姫（はんにゃひめ））と名付けました。百済より船頭龍伯（りゅうはく）が祝いに訪れ、天竺（てんじく）でできた観音菩薩という黄金の一寸八分の尊像を「娘の守り本尊に」と小五郎に贈りました。小五郎は、蓮城寺を建立し、中国天台山から百済出身の修行僧・蓮城法師を迎えます。般若姫は 13 歳となり、絶世の美人で、その噂（うわさ）は唐土（中国）長安まで届きました。中国皇帝の命を受けて二人の絵師と細工の名人が姫を写し取るために来たほか、天皇の勅使がきて般若姫を都にお連れしたいとまでいわれたのでした。小五郎は、勅使からの申し出を断固として断ると、朝廷から難題を次々と吹きかけられます。しかし、財力をもってことごとくそれに応えたのでした。

その頃、欽明（きんめい）天皇の第 4 皇子橘豊日皇子（たちばなのとよひのみこ）（後の用明天皇）が、般若姫の噂を知り、何としても会いたいと思い身をやつし、「山路（さんろ）」と名乗って豊後の三重内山まで密かに来たのでした。身分を隠した山路は、長者の牧場で牛飼となります。ある時草刈り仲間が手をやいていた荒牛（黄牛（あめうし））がいたのですが、山路の吹く笛の音で穏やかになり、いつかその笛を「草刈り笛」と呼ぶようになったのでした。やがて流鏑馬（やぶさめ）の神事の機会があります。的射（まとい）の神事に名乗りを上げる者がない中、山路が名乗りを上げ、これを見事にやり遂げます。この時山路は、身分を明かしたのでした。驚いた小五郎（長者）は、般若姫との結婚を許諾しました。間もなく敏達（びたつ）天皇より、山路へ上洛（じょうらく）の命が届きました。般若姫は、その時既に懐妊しており、玉絵姫を生んだ後に、山路を追って都に旅立ちます。しかし、瀬戸内海周防の沖で暴風雨に遭い、他界したのでした。山口県柳井市には、姫の無念な思いを慰め、その気持ちを思い般若寺が今に残されています。

炭焼小五郎夫婦の墓
建造 永仁四年 1296 年
（三重町内山）

以上

＊推薦図書 「万之長者炭焼小五郎」（佐藤芳延著）

豊後大野の「道の駅」売店や大分市中央町「コトブキヤ文具店」に置かれています。

添付2

真名野長者関連図
（作成　大嶋一任氏）
伊利金政（草刈氏次）
用明天皇（山路）
草刈氏
草刈衝継
景継
重継
玉絵姫
（橘次氏）
吉次信高
「金売り吉次」
吉次、吉内、吉六の
三兄弟
真名野長者
般若姫
聖徳太子
玉津姫
百合若大臣
来目皇子
正月王
藤津王
（登美真人藤津）
登美真人真名
（792－853）
源義経
〖般若時〗
（豊後）
（周防）
緒方惟栄
臼杵惟隆
亀井重清
宇佐木上七遠隆
〖蓮城寺〗
（伊予）
河野道信
＊蓮城寺、般若時、大山寺は、何れも真名野長者が建立とされる
〖大山寺〗